
テクスチャ in the メルクマール

蟻塚つかっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テクスチャ in the メルクマール

【Zコード】

N2143V

【作者名】

蟻塚つかつちゃん

【あらすじ】

僕と君 五十嵐坂祈りの世界の中心で愛を叫んだ獣。

僕は輪廻する。（前書き）

生きとし生ける物を泥水に浸したらおこしいかもな。

僕は輪廻する。

僕は歩く。
僕は歩き続ける。

5000匹の宇宙を連れて。
個々のビッグバンはエネルギー過多である。
だが、その色彩はスペクトルを超え、只の共感覚へ至る。
僕は歩く。どこに向かつているんだろう？

わからない。まるで思春期のこころみたいだ。

道路 花道ボトムアップトップダウンか餓鬼道カハかはわからない。けど僕は歩く。
僕は肩から腰へ一つの四次元カバンを提げている。

僕は歩く。

僕は歩き続ける。

その中には21世紀に流行した脳溢血のういつけつのアイコンが入っている。

毒蛾の鱗粉のようなコンピュータアプリ。

「そんな旧式捨てなさい」と恋人は言つけれど、
このファイルは僕の宝なのだ。恋人 君のいうことなんて聞くも
んか。

空気中から汲み取られた炭素は珪素ケイソ生物となつて、
このソフトを動かすのだ。僕はこれが好きなんだ。

僕は歩く。

僕は歩き続ける。

ドボン。

道中についた次元の捩ねじれに躓いてしまつた。

僕の身体は大きくよろけ、
その隘路あいじゆの側溝そくこうに足をインサーントしてしまつ。
「いけね」

ひとりごちてしまつた。あまりにもひどい様だ。

笑える。けど笑えない。

機械仕掛けのヘドロからなかなか抜け出せない。

膝まで「喰われた」僕は一所懸命もがくのだけれど、
諧謔曲スケルツオのような粘着性の水は僕を離さない。

シユールな状態を右目モノクルで眺める。

シユーシュツ、シユーシュツ。

何かいるようだ そこには

テトラ生命体がいた。テトラポッドに似た形状。
大きな口を開けている。鋭い牙が生えている。
僕は食べられるのだろうか。

と思うや否や、

ガブリ、ムシャムシャ、

僕は食べられたのだった。

。 。 。 。 。

。 。 。 。 。

僕は起床した。覚醒した
夢だった。

今までの経験は夢幻むげんだったのだ。

けれど嫌悪感ふんりつはなかつた。特殊な飢餓あいぞううがのよう。
悪夢ナイトメアではなく、なかなか充実していた夢だった。

お。

ここは僕と君の家。それは僕が一番わかっている。
和室のリビング。たぶん昭和前期エログロナンセンスから変わらない風景。
時計を見ると、午後三時どじかのあまつ。柔らかい日光でまどろんでいたんだ。
うーん、気持ち悪い。よだれかな？ 顔に何かついてるや。

まずは、顔を洗おう。

廊下カランをわたつて、僕は洗面台いっしんだいに行く。

蛇口カランをひねる。水が出た。タライに入れて、
水を顔に当て、口を動かす。

爽快感が口腔に広がった。
それは日輪か月輪か。
ふふ。

にやける。にやけた。

君の顔を思い出す。これは現実だらうね、きっと。

「……」

でも

デジャヴ。なにかい。

「あ」

水の中に蠍がいた。

死靈のようなその姿。

針が裁縫針ではなくマチ針だった。

ジャボン。ドン。ピキン。

僕はそいつに刺される。

不思議と痛みはない。毒氣が僕を巡る。
まるで惑星の地熱のように、
マグマの蠢動のように。

それは僕の血液を媒体として、
空々漠々とビタミンを壊疽していく。

……。

僕は歩く。

僕は歩き続ける。

僕は心臓へ向かい、大動脈へ向かい……。
蠍に刺された僕の中で、

僕は歩く。

歩き続ける。

僕の中で僕がいる。

そうか、ここは夢でありながら、僕の体の中なんだ。

メビウスの輪、クラインの壺。多次元宇宙。

ふ～ん。なるほどね。

そのエピゴーネンを内包しながら僕は歩き続ける。
歩く。ただ歩く。明晰夢と知りながら、僕は歩く。
僕の体内を。

あれ、やつぱり夢だなあ。

再確認した。かつこ確乎たる保証がある。

さつき認知した君の 恋人の顔を忘れている。

そう、夢だから。これは夢だから。

君、五十嵐坂いがらしざか祈りの顔を忘れたんだ。

だつて、

ねえ、

現実じやそんなことはないんだから。

絶対忘れはしない。

僕たちは恋人わかれることのないふたり。だから。

僕は君を愛しているんだから。
好きなんだから。

風が孵化する。（前書き）

油膜めいた君の皮膚をいつ破ろうつか？

風が孵化する。

上位構築めいた夢から覚める。

よつと。

横臥していた僕は重たい腰をあげた。

ひゅー。ひゅるりり。

薰風がひとつ吹いた。

ちりーん。

風鈴もなる。庇護された朗らかな音。

「ふう、風が気持ちいい。まるでセックスのよつ
僕の横にいる君が呟いた。「おもしろい例えだね」
僕はその畸形な身体を覗きながら、

沈黙していくシンボルを心の奥で感じた。
僕は両手で壊してしまつように強く握る。
リトマス試験紙のような彼女の足首を、

「ふう」これで目が覚めるだろう。

彼女は啞然としているが別に嫌つてはいるわけではなさそうだ。

「どう? 気持いい?」

「……うん

「さつきの風どどっちがいい?」

「……これ」

彼女は林檎のように真っ赤になった。

こんな日には散歩するにがまる。

壁に囲繞されている1号公園にやつてきた。

相変わらず恋人　君は来ない。

彼女はめつたに部屋からでない。なんでだろう? たぶんあの外見
に関係あるんだと思う。

とか言つてこの次の話とかその次の話とかで家の外部に出るんだ

けど、そんなメタな話はいらないか。彼女は「……」無言で僕を見送った。たぶん行かないでほしかったんだと思う。でも、今生の別れじゃあるまいし、百鬼夜行（ジユブナイト）小説でもない。ただ数分間さ。このお話でも君の出番はあまりないんだ。ごめん。（ごめん。どうじやこにはなじはすてちまえ）おっと、メタがすぎたかな。

閑話休題

いつも君と一緒にいる。それは恋人同士だから。でもたまには一人になりたいときがあるものさ。人間だもの。だから僕はこの孤独趣味を純粹に楽しめそうだ。これは君への刃こぼれした優しさなんだろうね。君も一人でテトリスでもしといてよ。

流星群がブランコに宿る。

プラネタリウムの美しさが田に浮かぶ。

公園は夜だつた。歪んだ日^{（ヒ）}夜はおもしろい。家を出たのが確か……夕方の5時だつたはず。

てくてく。てこてこ。

目の前にシャケ色の人物が歩いてきた。てくてく。てこてこ。

僕はスルーしようとした。けれど

「あの~」

僕に用があるのだろうか？ 声が掛かつた。

それは湾曲した流体細胞の塊だつた。

彼は鹿爪らしい様子でこう言った。

「僕の顔を描いてくれませんか」

「うん？」一瞬意味がわからなかつたけど、よく見るとその塊は顔がなかつた。のつぺらぼう。

「じゃあ、僕がレイアウトしてあげる」

お気に入りの四次元カバンから蛍光ペンを出して、その顔に嘘（ほんとうのかお）を描いた。

「ありがとう」彼は満足したのか帰つて行つた。
ダミーの顔でもいいんだろう。

自己同一性を求めていたんだろうな、と僕は思つた。
そうぞ、人生は人生ゲームのようなモノ。一歩歩けば竜巻で振り出
しに戻る。彼はそれが怖かつたのだろう。

「ふう~」溜息ひとつ。

そろそろ帰ろうかな。

結局、一人にはなれはしなかつた。でも、なんだか、心地よかつた。
てつてつて。とつとつと。

僕は歩いて帰る。

一歩ずつ踏み出して、

それはまるで自首するかのようだ、
散文詩のように、

奇麗な音韻を踏んで、僕は歩く。

「やつぱり風が気持ちいい」

声がする。君の、五十嵐坂いがはざか祈りの耽美な美声。

おや、そういうことだつたのか。

僕は理解した。そしてカバンの間隙かんげきから

四次元カバンのなかにはひとつモニター、が見えた。

「君、いたんだね」

「そうよ、ずっとといったわよ。物語の最初から、ね」

「まるで、」

「うん、人生ゲームのように、ね」

ふふ。キメラ化した電波に接続した恋人は笑う。

その笑顔がなんとも……いえない。好きだなあ。

「ね

チューブをチューニングしたばつかだから、

音が清冽だ。君の声が春雷のように聞こえる。気持ちせつぱりだ。
耳朵を舐めるよう。

「ねえ」

「なーー」

「ーーの風は君にどんな祝福をーーえるんだねーー。」

「私は風を感じられないわよ。ーーのモニター越しの世界じゃあ「そーか……」

「でも、きっと

」

君は言つ。

「私たちへのーー都合主義ラブソングでも歌つてくれてこらんぢゃないかしら」

ふふ。僕は笑う。そうだね。「僕もそつ思つよ」

「うんつ。我家で待つてこるわ。君が帰つてくるのを」

「うん。じゃあね」「じゃあ、ね」

通信は切れた。交差点の信号のよつと。〒つみのよつと。すぐ。

そうだ。

いいことを思いついた。

この風を持つて帰ろうと思つ。君のため。

僕は君を愛してこらんぢから。

カバンをじそーーせ、

お。これこれ。

僕はカメラを取り出して、

カシャリ。

風を記録した。写真に収めることに成功した。

これで土産ができた。君への幾何学模様アーティザン。愛のプレゼント。

うん。

僕は歩く。僕と君の家に向かつて。

考える。ここにこしながら僕は考える。

現像しないとわからないけど、きっと、ーーの風は透き通つてこらんぢから。

まるで君の白い皮膚みたいに。

と。

墓が収斂する。（前書き）

幻影のギロチンに首を捧げませんか。

墓が収斂する。

久しぶりに母親の墓参りにいこう。
僕は思潮を敷衍しながら双眸を開いた。

「そう。じゃあ、私も行くわ」

「本当かい？」きっと母も喜ぶよ

「うんっ」

君　　恋人は僕の母と仲良かつたからついてくることになった。

「じゃあ、待ち合わせしよう

「そうだね」

一緒に家に住んでいるのに別々に行くつておかしいと思う人もいるかもしねりない。でも僕たちはそうやつて過ごしてきた。まるでそれがデフォルトであるように　狂言綺語のように。

楽しみだ。

君とのデート。なんて、嬉しいんだろうか。たぶん君は外にあまり出ないから、ね、それが僕の鬱憤的不満だつたんだ。でも君も確かに人間で僕の恋人。そりやあ外出するときもあるさ。女の子だもん。

僕は五分前に待ち合わせ場所の戦場にきた。

荒れた城塞。城壁。障壁。がしゃごくろも笑っているや。

やつぱり戦場、紅く濁っているね。

「君はまだかなあ」僕は小さな声で囁く。
まるで運命をもがくように。

その一秒後、

有象無象を巻き込んで、
磊落な君がやつてきた。

ピンクのワンピースが、
君の美貌を強調している。
あたかも桜花のように。

「相変わらず「ケットリーだね」
「あなたこういうの好きでしょ」
君の三つ田の田^{つぶ}がウインクした。
四つ田の田は瞑^{つぶ}つていたけど。
さんさんさん。

太陽が高かつた。まだ一時くらいだらうか。

その墓は山の一番上にあった。

僕たちは上る。

心情を掩蔽^{えんぺい}しながら、

脱水症状にコネクトしながら。

空中分解する飛行モービル。

厭世的な入道雲。

墮胎する処女懷胎。

いろんな対象を見ながら、
僕たちは上る。

「ふう」息を吐いた。

「疲れちゃったの？」君は笑う。

「少し、ね

「じゃあ」といつて君は唇を突き出す。

「うん」僕は自分の唇をそれに接着させる。

^{ギガバイ}1 GB

唾液を通して情報を交互処理する。

恋人のエピステーメーは聖女の憎悪のようだった。
政治の矛盾点を内包する琥珀色の上位構築。

「いつも通りの冠詞だね」

「うん。 the の虚栄がわかるでしょ」
接吻^{キス}は終わり、再び歩き続ける。

塀域^{せいいなるはかば}に到着した。

僕たちは墓前で祈つた。

世界が終りますよつに。

世界が始まりますよに。

その時、僕の致命的な傷が痛む。

「あんた、きたんだね」

逝った母親の様子がインストールされ、母の言葉が紡がれる。

「楽しくやつてるよ。あんたは幸せかい

と声がかかる。まさしく母だ。

「うん」

数分間、母と会話をした。久しぶりだつたけど、なにもかも変わつていなかつた。死んでいるからそうなのかもしない。話によれば、破門された僕の母は、自分だけの天国で娼婦きょうふをしているらしい。

「密はいないなけど、儲かつてあしらつているんだよ」

「そつなんだ」僕は唱えた。

まあ、幸せならいいけどね。

母はいつのまにか消滅していた。喪失感はなかつた。
飄々ひょうひょうした君が言う。

「じゃあ、帰ろか私たちの家に」

「うん」

いつの間にか日が落ちてついる。

鮭色に日華が奏でてはいる。

嘘八百。

天地創造。

神の脳髄。

……帰りも多種多様な幾何学を見た。

「僕も死んだら、ここに埋葬されるのかな」

僕はここぞとばかり訊いた。

それに対して冷笑的に君は言つ。

「そうよ。きっとそつよ」

「死ぬつてどんな感じじかな」

「アヘンのようで、仮想化された図書館に近いわね
「ふーん」

僕は君 五十嵐坂いがらしさかいの 祈りの肩を抱いた。ゼロ距離になるまで近づいた。いわゆる融合つてやつだ。君の精神と僕の精神が触れ合つ。二が一になる。いうまでもないが、この現象は数分間だけさ。けど、たぶん忘れはしない。何回も結合したけど、心地よい。気持ちよい。セックスとは違つた快楽。スパッとせかいをかるもの だって肉体じゃなくて精神、心だ。それが瀰漫する。剃刀のようブンブンとせかいをこねするもの ながら、蜜蜂に似た世界観だ。やつぱり、いいね。

そのまま僕たちは落日を背に坂を下つた。真つ赤な円が僕たちを祝さい福ぞくしていた。

僕たちは気持ちよかつた。

櫻は詠んでゐる。（詠書も）

誤認した歌姫の突発的な演技はよかつた。

雨は醜陋する。

5月葡萄ワイン ポルトワイン 日、天氣雨。風は猛々たるものなり。

じめじめする。

鬼哭啾啾の庭。
けんきょううしう

牽強付会な花束。

「うーん、気持ち悪いなあ」

僕はこんな青白い雨が降る日が苦手だ。

電波も膨大な量が卑金属に降り注ぐのだ。
じたいう

混淆した平仄が食卓に出る。

これがまたびっくりするほどまずいのだ。

トコトコ、トトト、

「なーに更けているの」瓶がしゃべる。
瓶がしゃべる。

埋没した精神では如何せん悲しい。

けれど華奢な君がいてくれれば元氣百倍や。
しつこいけれど、僕は君のことが好きなんだ。
すべてを愛しているんだよ。

「今日は外出しないよ」

「あら、今日は家に閉じこもるの？」

ペイント

「うん。雨が降っているからね。まるで黒魔術のよつな雨だもの。

呪われそうや」

「そうかしら……」

「でも これで君と一緒にいるのがいいやローラー

「ばか」

君の頬が赤く染まる。

かわいい奴め。

僕は即物的にその脱け殻を食べる。君の感情の脱け殻。故郷の味がする。母の味だ。先日謹んで墓参りが思い出される。ゾンビーとレ

「ねえトランプでもしない？」
君のリポジトリが瀰漫する。

十三次元の笑窪がかわいい。まあ、どこの部分でも霧のよつに白くて奇麗なんだけど。

「暇だし、しようか」

「うん！」

なんて幸福そうな笑顔なんだ！

ますます君を好きになってしまったじゃないか。

僕がカードを混ぜる。そして一枚ずつ配る。手札は7枚。
おや、なんてことだ。

手札が全てジョーカーだけだ。

こんなこと初めてだぞ？

でもいかさまにしてはあまりにも端正すぎる。

でも、僕がカードを繰んだから、君の罠ではないよつだ。
ランダムサンプリング

無作為抽出における5%の算術誤差かもな。

僕がこの矛盾を言つ前に、

「私から出すわよ」

と君は柔らかな鼻の線をきらめかせて一枚の「尖塔」を提出した。

それは炎帝の司る新橋色のカードだった。

僕はそれに対して「遡航した」ジョーカーを出す。

「ふふ」彼女は余裕の笑みを浮かべる。

結果はわかっていた。というかこの手札の時点では……ねえ。

「負けたよ、僕の負けだ」

そりやあ、そうよね、と言つて手札のカードを見せる。

「修道士」「アンニコイ」「解剖」「鎧袖一触」

みんな強いカードばかりじゃないか。

「ふふ」君は笑む。

神から庇護されたこの家は、そんな颶風ぐふうには負けない。
だって君と僕の家だもの。そんな暴力じみた暴力でこの愛の城は崩
れないさ。

僕たちはトランプを止め、陽炎が昇る部屋で、
ポチッ、と

テレヴィイを受けた。

その映像では、襤襖ボロを着る落伍者が自然に擬態していた。

「趣味じゃないわ」

「う~ん」

コロコロとチャンネルを変える。

でも、僕は、「興味深い番組はないな」といつてリモコンの赤いボ
タンを押す。

ふつん。

テレヴィイは完全に沈黙した。

「何しようか?」

君は言ひ。僕の胸は妖しく鼓動した。

「……」あえて返事をしない。君への を するためだ。

そして、僕はいつもの蛍光ペンを取り出す。脳に直接、詩歌を書く。

「産業廃棄物は君への恋文……「う~ん」

「詩を書いているの? いい詩じゃない」

「それほどでもないよ」

謙遜する。赤ら顔で 君に褒められるなんてそれほどないからね。
「贋物の城は君を包む……つてどうかな?」

君が提案する。いいじゃないか。

「おどろおどろしいキップルは喋喋喃喃べいべいがんがん」続けて君は言ひ。

「砂糖菓子はガラス細工」僕は負けない。

「面会謝絶は機械仕掛けのことく」

「タイムマシンはまだ爆ぜた。運命を殺すよつて
ふう。

「……いい詩だね。これもアップロードするの？」

君は首をかしげて訊いた。

僕はいつもあるサイトに詩を投稿している。「無題詩」という名で。それは皆き土壤のように単なるアウトサイダーなかもしない。自慰行為かもしない。けれど、僕は 投稿し続けるだろう。

君の次に大切な趣味なんだから。

「ううん。これは僕だけのアルバムに挟むんだよ」

僕はやさしい嘘を吐いた。

「そうなの？ いい詩なんだけどなあ
ごめんよ。その日になつたらわかるよ。君にあげるんだから。樂しみにしといてくれないか。

僕の意図に反して いや、賢い君はわかつていたんだと思つ。

君は偽善じやなくて本当に賢い。僕は到底及ばないな。

「もうすぐで私の誕生日よ。何くれるのかしら」

と、彼女は僕に聞かせるつづいて呟いた。

僕のもくろみはとっくに理解できていたんだろうな。

「楽しみにしといてよ。きっと喜ぶものを」

「うん！」

君へこの詩を捧げる。……これが君へのプレゼント、だなんて今言えないな。君はわかつているだろうけど。

君はわら束のようにしんみりした。

「私もあなたが好きだもの。信用しているわ

……僕の顔がアプリコットのような色に変わるのが実感できた。

相変わらず、兩はくチャ・ピ・チャと降り続けていた。
けれど、僕はそれを黒魔術ではなく、 そう白魔術のよつに認識
していた。

どうしてだつて？

言わなくなつてわかるでしょ？

君 五十嵐坂いがらしざか祈いのりのおかげさ。

僕の大切な恋人。うん。僕は君を愛し続ける。

君は言いつ。

「ねえ」「うん」

わかつているさ。ね。

そのあと、僕は君と函はこを楽しんだ。

妹が蔓延する。（前書き）

異端の神は偽善の末裔を食べる。

妹が蔓延する。

実家から26人の妹がやつてきた。

「うつすー兄貴」 「おはようございますお兄様」 「にいにい、久し振り」

数々と声を掛ける妹達の何人かは墮落していた。ドロリと溶けたその身体から産業廃棄物が漏れ出ている。放射能を含んではいなから、人体には影響はない。

きっと戒律に違反したのだろうか。

もしくは贖罪に失敗したんだろうか。

どちらにしても厭世的な生き方をしていたに違いない。僕もいつ、そうなるかわからぬ。その現象は無作為抽出だから仕方ない。来

世で頑張ってくれスライム妹よ。

溶解している彼女らの美声の残骸が次第に固体化する。それはandan……空気中の水分を含む。ゲル状の物体は縞色と驟雨が混在していく、何か切ない。部屋の湿度が急に上がる。

じめじめ。

じめじめ。

恋人はゲルになった彼女の声を拾つて鍋の中に入れている。

「これがおいしいんだよ」
確かにね。

僕たち28人は鍋の周りに座る。

「はい、5番の妹さん」と恋人は皿を渡す。

「ありがとん。空も飛べそうです」

その白亜の食器を受け取ると妹は「自殺の悲しさ」を大匙5杯入れる。

「味付けは、世界を征服するんだ」と声を出す。

「ふふ。相変わらずだなあ。

まあ、僕には理解はできないけどね。

そのとおり「あたし我慢できな」よ」 と慌てて何番田かわからぬ

弟妹

沸騰してゐる鍋の中に入らばとする

「騒然とならなかつた」

けれど、沈黙はすぐに壊れた。

足を鍋の淵に掛けた。

するとその奇麗な足首がするり、と吸い込まれた。

妹がブラックホールのように吸われるようになくなつた。その場から一人妹が消滅した。

無となつた妹の姿は、それはそれは胡乱としていて大瀑布のようだ。

「あらあ」と恋人はうつろに笑う。ははははは、と笑つた。妹25

人も笑う。
でも僕は笑えなかつた。なぜか胃の腑のあたりがぞわりとした。そ

これは先ほど食べたキリストの肉うみがめのすいぶが胃液で溶けたからかもしれない。

詩問卷

机の上を見ると真っ白な食器には何も乗っていない。 25人の妹は、鍋を食べ切ったのだった。

僕は訊く。「25人の妹たち、どうだったお味は？」お口に合つた

妹は答える。「うんっ！」

それはよかつた。

「でもさ、」11番目の妹が首をかしげて質問する。

「えつ！」

「この鍋に何が入つてたの兄ちゃん!」「……中身は……?」「

材料はなんなのよ、兄さま

はははは。僕は笑う。「普通のモノさ」

「花飾りと蟻地獄、そして天使の唾液が入つていたのよ
君が得たり顔で妹たちに説明した。

「あとはね、リングだね

妹の何人かはいつのまにかメモを取つてゐるようだ。

「……そんなところよ」君は満足そうな顔をしている。僕は鍋の材料はこの家だけの完全秘密にしたかつたけど、君がそんなに嬉しそうに言うんだもの。止められないや。うん。笑顔は僕が困るほど綺麗だ。

25人の妹たちは君を見つめた。そして口ぐちに言ひ。

「さすがにお義姉さん」「すういです姉じや」「美しいですものね、姉さん」「早く結婚したらいいのに、ね」「うん」「そうです」「私もねえねえのような人になりたいな」「うん」「うん」「うん」

君の顔が夕焼けのように真っ赤になつた。

いつものクールビューティはどこか遠い所に出張したかのようじどこにもいない。動きもぎこちない。恥ずかしそうに言つた。

「ば、ばかっ、そんなつもりで言つたわけじゃないんだからね。て、てか、私は、まだあなたの『お姉さん』じゃないんだから。私達はただの恋人よ。結婚はまだしてないわ。ね、そ、そうでしょ?」「……」僕はにんまりと君の顔を眺める。

「! もう、ば、ばかばかばかばか

君はぽかぽかと僕の胸を叩いてきた。痛みはない。甘噛みのようなものだらう。

僕は、そのまま、君を、抱きしめた。

君は驚く。でもそれを肯定したようだ。君も抱きしめてくれた。静かに僕は言つた。

「君が、好きだ」

「……私も、よ

抱擁は終わり、君と対峙する。

見つめあう。視線と視線がぶつかる。

エーテル麻酔のような沈黙が数秒続く。

僕は決めていた。

うん、
言おう。

「……僕と、結婚してくれ」

「あ！」

君の身体がブルブルと震えている。激しい心臓の音ねのが聞こえる。僕の一世一代の告白に動搖しているようだ。口を動かしているがそれは声にはならない。まだ眠るお母さまを想像できるほど君は、あわてている。

君は目をつぶつて深呼吸した。ふうーはー。ふうーはー。落ち着こうとしているのがまじまじと伝わる。

静かに目を開けた。

そして、君はたぶん僕が君と出会つてからの一番の幸せな顔をして、

口を開いた。

「……はい、じちらじら、お願ひします」

拍手喝采が聞こえ、僕たちは長い長い口づきをした。

「おめでとう」れこます「……よかつたです」「おめでとー」

「ありがとう」僕は妹に感謝した。

「今度会つときは30人になっているんだる」

「そりや当然です」と妹と最後の会話をして、

妹達は「じゃあ帰ります」といつて僕の、いや僕たちの城から出て行つた。

そのとき馥郁たる香水の匂いが香つた。ネクロフィリアのアロマのよう。

「忘れていました」一番目の妹が帰ってきて「これはお土産です」と言つて四角い箱をくれた。棺のようだつた。本当の帰り際に一番目の妹は言つた。「お幸せに」

「結局、妹つていうのは理想郷のトークンだつたんだね」君は小さく言つ。

「そうだね。ただの漆黒の煤煙なんだよな。手で掴めない」広い広い家には僕と君しかいない。

数時間前との関係より進展した君^{きんそくほつと}が言つ。

「あなたの妹さんまるで自殺^{きそく}帮助^{ほじょ}みたいね」

「あ、よく気づいたね」

「だつて、生命保険の塙壠^{あくまのけこやく}が透視^{とうし}できたもの」

「そう」

僕たちは短いキスをして、

遠くから流れる弔鐘^{だいの}を聞いた。

誰か夭逝^{てうしき}したようだ。

僕は思う。

この重低音は君の唇の恣意的な鳴動に似ている。

静謐な君との口付けが終わる。もつとしたかった。

「そうだ」お土産^{じょくさん}はなんだらう。心臓にも似た箱を開いた。髑髏^{じくろ}が入っていた。

また、変なものを買つてきて……。

君は言つ。「けつこう、おもしろいじゃない」

よく見ると、そのシャレ口^{くち}はけらけら嘲笑^{わらわら}していた。

何かのパロディだらうか。自衛隊かな？

すっかり広くなつた僕の部屋で、

「じゃあ、巡礼^{じゅるい}でも行かない？」

と彼女が声を掛けた。

そうだな。讃美歌も聞きたいし。

「じゃあ、行くか

粗悪品のような鈍く嗄れた声を出す。

鮮血に汚れた僕の超自我を洗濯しよう。
そして君への恋心を鋭敏化しないとね。
きっと君は朧月夜に映えるんだろう?

僕はわくわくした。血管が蠕動運動を始めた。

君 五十嵐坂祈りは、今日、僕のお嫁さんになった。

うん!

僕たちは教会へ出かける準備をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2143v/>

テクスチャ in the メルクマール

2011年10月10日03時28分発行